

編集委員が選んだ本

『戦時体験の記憶文化』

滝澤民夫／有志舎／2008年7月／5,880円

「戦争と平和が人びとの生活をいかに形づくって行ったのか、またその記憶の継承はどのようになされ、あるいは、なされずに次の「戦争」を準備して行ったのか」を問題意識として、埼玉県公立高校で教職34年間をひたすら追究・実践・運動を続けてこられた著者の集大成である。「戦時体験の現在」「戦時の地方映画館と民衆」「戦争と新聞広告」「戦時下の学校」「戦争と民衆動員」「戦時体験の継承」という視点から、1931～45年の戦時体験の記憶文化を中心に読み解こうとした労作である。

『日本国憲法誕生 知られざる舞台裏』

塩田純／NHK出版／2008年1月／1,575円

時々、テレビのスペシャル番組を見ていて、視点の鋭さや取材の綿密さに舌を巻くことがある。2007年2月と4月に、日本国憲法の制定過程に焦点を当てて放映された2つの番組もそうだったが、それが1冊の本になった。

これまで、日本の民間の憲法研究会の案をGHQが参考にした「と思われる」という書物は目にしてきたが、ここまで当時の核心にいた人物の証言に迫ったのは初めて見た。「押しつけ」論の空しさがよくわかる。

また、視野を世界に広げ、従来見逃されがちで、極東委員会を中心とした連合国の動きも注視している。マッカーサーが判断を下すさい、ソ連やアジア・太平洋諸国の視線をどう意識していたのか、読者自身が追体験している気分になれる。ベアテさんなど、証言も充実。

『いのちの恩返し』

山田泉／高文研／2008年5月／1,680円

乳ガンと闘病している元養護教諭・山田先生の「いのちの授業」の記録。昨年の『「いのちの授業」をもう一度』の続編。現職を去ってからも、厳しい闘病を続けながら「町の保健室」を自宅に開く。希望や夢を失った「今どきの子どもたち」に「人間っていいな」と実感させていく様子は、学校現場に求められている要素の1つだろう。

『断髪のもダンガール 42人の大正快女伝』

森まゆみ／文藝春秋／2008年4月／1,800円

1911年の『青鞥』の登場、第1次世界大戦で戦場に行った男の穴をうめるために断髪した欧州の女たち、それが映画や雑誌のグラビアで日本に紹介、1917年のロシア革命……それらを背景にして日本では、帝国憲法下の「デモクラシー」が展開した。「昭和」を迎えてからもしばらく、「モボ・モガ」「毛断嬢（もダンガールの当て字）」は都市を楽しみ、外で働いた。その同時代に、何らかの関係性を持っていた42人の女の評伝をまとめている。

『生きさせろ！ 難民化する若者たち』

雨宮処凛／太田出版／2007年3月／1,365円

不安定なフリーター生活が、どう精神を破壊していくか。非正規雇用の拡大と際限なきコストダウンを図るカラクリと、それがいかに企業のモラル低下を招いているか……筆者（とその親族）も体験者だけに、実にリアル。

何人もインタビューが載っているが、その中で一番印象的だった、フリーター満喫青年の一言。「夢とかいってると時点でカッコ悪いっていうか。やりたいことがあるとか嫌ですね。そういう希望がある感じが嫌なんです。」この感覚、秋葉原無差別殺人犯の「希望のある奴にはわかるまい」というセリフと、通底するものを感じる。

『アイヌの歴史 海と宝のノマド』

瀬川拓郎／講談社選書メチエ／2007年11月／1,680円

「自然との共生」「狩猟民」といったイメージで語られることの多いアイヌであるが、筆者によれば、「富を求めて異文化と交流しながら、激動の世界をしたたかに生きたアイヌ」ということになる。札幌から千島列島の北端シュムシュ島までの距離が、東京と沖縄の距離に匹敵するというのを考えたとき、北方世界の広がりが見えよう。今年の6月に、アイヌは「先住民族」との国会決議が採択されたが、日本の辺境としてではなく、独自の歴史や文化を持った先住民族として、日本史の中にどう位置づけ、教えるのか、考えなければならない課題である。

『禁じられた歌—朝鮮半島 音楽百年史』

田月仙／中公新書ラクレ／2008年2月／861円

在日コリアンの高校生を主人公にした、映画「パッチギ」の中で歌われた「イムジン河」は、1968年レコードが発売中止となり、話題となった曲である。朝鮮半島の統一を願う歌が、なぜ発売されなかったのだろう。日本統治下の朝鮮で、抵抗の歌とみなされ歌うことを禁じられた「鳳仙花」。その作曲家、洪蘭坡が現在「親日派」として糾弾されているのはなぜなのだろう。1980年代半ばに大ヒットした「釜山港へ帰れ」は、男女の別れをテーマにしていたが、韓国の元歌では家族の別離がテーマとなって圧倒的な人気を得た。なぜ家族の別離なのか。在日コリアンの歴史や、南北分断による離散家族の歴史などと重ね合わせて見ることで、その謎が解き明かされていく。金大中政権の1998年以降、日本文化開放政策が進む韓国ではあるが、依然として、テレビやラジオで日本語のCDやミュージックビデオを流すことが制限されていることを意味を考えたい。